

『神都物語——伊勢神宮の近現代史——』

ジョン・グリーン、吉川弘文館、2015年

おやさと研究所教授

幡鎌 一弘 Kazuhiro Hatakama

先日、京都大学人文科学研究所の研究会の一環で、二十数年ぶりに伊勢神宮へ行く機会があった。修学旅行以来という者も含め日本人十数人の参加者を現地で詳しく案内してくれたのが、本書の著者でイギリス生まれのジョン・グリーン氏だった。グリーン氏はケンブリッジ大学卒で、SOASを経て、現在国際日本文化研究センター教授。すでに、*A New History of Shinto* (Mark Teeuwen氏と共著、Wiley-Blackwell, 2010) や『儀礼と権力 天皇の明治維新』(平凡社、2011)などを上梓し、いまや国内外を問わず近代神道史研究の第一人者である。

本書は、20年に一度行われる式年遷宮を分析指標とし、伊勢神宮と国家・国民・天皇との関係について、明治期、大正・昭和(戦前)、戦後の三段階に分けて論述する、伊勢神宮の本格的な近現代史である。

最初に本書の概要を簡単に整理しておこう。

本論は3章からなる。最初の「神都」の形成過程では、明治の出発点として、神仏分離、御師の廃止、大麻頒布の禁止、参詣者の参拝区域の制限など、神宮をめぐる空間的・政治的な変化から、「伊勢大廟」として神聖性を獲得していったプロセスを明らかにする。一方、参拝者が激減した門前では御師・遊郭が宿屋業へ転身しており、地元の人々を中心に結成された神苑会が復興を期し、神宮を中心とした整然とした近代都市空間を計画する。博物館といった歴史(神話)を語る施設の建設、アクセスのための交通網の整備が進められて、伊勢山田=神都というブランドネームが定着していったことを指摘する。本書のタイトルとなっている「神都」はまさに近代になって創出された言葉であり都市なのである。

次の「大正・昭和期の国民と伊勢神宮」では、1929年に行われた式年遷宮をさまざまな角度から取り上げ、天皇の祭祀として近代の天皇が遷宮にどれほど深くかかわるようになったのか、遷宮が国家・国民の祭祀としてどのように位置づけられていったのかを示す。浜口雄幸首相や貴族院・衆議院議長、陸海軍大臣が参拝したことが象徴的だが、私が興味深く思ったのは、この時には、朝鮮総督府・台湾総督府・関東庁・樺太庁・南洋庁の職員も加わっており、まさに日本の版図が反映されている点である。内宮の遷宮の日は祝日になり、ラジオの中継、学校での奉賀式(遥拝)、地元神社への参拝など国を挙げて奉祝された。これには、政府の働きかけだけではなく、主要新聞(『朝日新聞』)による宣伝、小学校の授業による効果があり、伊勢と修学旅行の結びつきも注目されている。

「戦後日本と伊勢神宮」では、神道指令によって国家管理を離れた伊勢神宮がどのような運動を行ってきたのかを明らかにする。皇室の大廟であるという前提を失いつつも、皇室、国家、国民を結びつけて主張し行動する。ときに国家神道体制を否定したかと思えば、皇室との関係を強調して脱法人化を目指し(真姿顕現運動)、信仰を説いて人びとを動員する。功利主義的にすべてを選択肢に入れ、多層・多様な人々を巻き込みながら活動が展開している様子うかがえる。地元でも近鉄によるリゾート開発や道路開通、門前の再整備が行われており、このような聖俗両様の折重なりを読み解いて行く。

以上のように150年に及ぶ伊勢神宮の近代を振り返り、最後に安倍首相が現職総理として参拝した2013年の遷宮が伊勢神宮の歴史のなかで大きな画期となると予想して本書を閉じる。

私が研究を始めた90年代後半には、国家と民衆(支配・被支配)という二分法での議論がある一方で、ポストモダンの影響を受けて国民国家論として理解される傾向が強まった。内面化された諸要素によって人々が国民として立ち上がってくるのであり、国家機構の外部にあるようにみえる「民衆」とはいえ、そこに国家的な要素が強く刻印されるという考え方である。ここでは公私の区別がいったん無効化されていて、政教分離や信教の自由の概念があいまいになってくる。本書は国家神道を国民国家論として位置づける研究といってよく、戦前の神道非宗教論が前面に押し出されることはないし、実態を見るとときにはむしろ邪魔なのだろう。本書の見立てに従えば、国民国家論の視覚がより有効になるのは、大正から昭和期ということになる。いうまでもなく政党内閣の時代であり、宗教教団にとっても比較的自由的な活動が許されていた。このようなときにこそ、国民に内面化された国家が発揚しやすいのだろうし、されなければならないのだろう。

伊勢では非政治的な響きのある「信仰」が政治や国家に直結する。グリーン氏の描くこの時期の伊勢神宮は、私なりの表現ならば、「国家神道の民衆宗教性」がいかに発揮された姿ということになるかもしれない。当然それは、「民衆宗教の国家体制化」の反転した姿でもある。

神苑の整備に際し旧来の建築物を撤去し新しくかつ伝統的な空間を創出するプロセスでは、伊勢をめぐる神話(教義)を念頭において構想されているということも注意しておかなければならない。鉄道の敷設や道路の開通もどこかでそれにひきつけられていく。いうまでもなく、近年の景観や建築を含めた宗教論とも密接に関係している。このように本書は、聖地が宗教的な場であり都市であるというその性格を十分理解しつつ構成されていて、「政治権力」に着目するとはいえ、宗教研究に示唆するところが多い。

本書を読み終わった感想を率直に言えば、すべてのものを巻き込んでいく伊勢神宮の懐の深さである。皇室・国家に力点を置きつつも、一方で民衆にも目配せを怠らず、パワースポットも上手に取り込んでいる。明治初年に内宮の優越を説きながら実際には外宮の参拝者の方が多く、これが逆転して内宮の参拝者が多くなるのは100年後の1990年代である。ことによると「世界に誇るべき大日本の一大聖地」としたいという1930年代の思いが、100年後に外国人を含めた研究者によって伊勢が世界に発信されることで実を結び始めるのかもしれない。

果たして10年後あるいは100年後に本書が神宮の歴史のなかでどのような地位を獲得しているだろうか。私には本書もまた伊勢神宮の歴史の転換点になるような気がしている。

